

定年俳句誌

10 2012年
月 号

かたね

ふ



黒羽集

(九)

佐藤喜仙

釣宿の早寝の耳に河鹿笛

夜の秋詩の道遠き本の嵩

子供等の帰省少なく遠花火

帰省子のまづ墓に母訪ひにけり

花火果て空に戻りし星座かな



苦瓜の花はまことに小さきかな

細蔓に大きき苦瓜吊しけり

葉おもてに白線とほる青芒

波に波重ねて滾る梅雨の河

大樹の影昏みて咲ける九輪草

花はちす時を重ねる三日月湖

涼亭の建ちたる水面に雲の峰

かやね集

白選句集



「水引草」

松本周二

「青蜥蜴」

古川千鶴

結ばれるほどの長さに水引草

二人とも半身はみ出す白日傘

花園の蛩袋のやすらぎに

麦秋の刈り残されて道祖神

遠雷を犬聞き分けて引き返す

高校野球猛暑を弾き返す音

土用風。ぼつりとひとつつ夜釣り船

シベリヤの大地の果てや雲の峰

遠来の子ら寝ねにつき夜の秋

蜘蛛の囿の銀の糸織る雨上り

高原の甘藍かりり歯切れ良し

風筋を探る舌先青蜥蜴

「朝顔」

川井素山

「秋」

菅原

孟

朝顔のからむ路地裏とうふ売り

どぜう屋に宵の灯ともり賑はへり

人工の汀素足で歩く夏

竹林の葉擦れしづまり老鶯鳴く

白蓮を染むる夕陽や暮れの鐘

烏賊釣火闇の波間に明滅す

秋茜夕空見上げ余命知る

椰子の実や恋路ヶ浜の秋の色

石磴の秋の山寺千余段

行く秋の草に隠るる田原坂

朝の浜台風一過の烏賊拾ふ

野分吹く撞木いささか揺れてをり

「秋近し」

安藤虎酔

窓あけて吹き込む風や秋近し

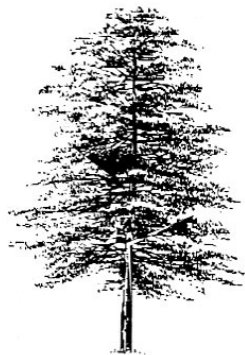
山寺に一雨ありて秋近し

スコールに木肌いきいき森の木々

蝉の声三味の音消す奥座敷

星月夜ピアノの響き垣根越し

をさなごの飯事遊び赤のまま



撫子集

本郷宗祥

風に揺れ道の辺おほふ猫じやし

みんなが主役となりて蟬時雨

立葵色褪するまま畦にあり

スコールのごとき夕立に立往生

道端に向日葵一花咲きにけり

小池清司

打水の柄杓で道を教へられ

罪のない顔を並べて三尺寝

山車の如蟬曳かれゆく蟻の道

蔵造りの漆喰窓に風涼し

斑猫に案内をされて柚の道

主宰選



友釣りの鮎もつれあふ竿の先 米田文彦

飛び跳ねし姿彷彿鮎料理

端居してなつメロを聞く夕べかな

髪あげて祭浴衣のすまし顔

片蔭に駐車の列の昼休み

山上湖湖畔に据うる籐寝椅子 小林美登里

早空雲は小さく流れ行く

深山の寺の鐘鳴る晩夏光

四段の滝それぞれに壺を持ち

目もあやな小雨の薔薇刺は鋭し

旗揺れず氷菓売りたる裏通り

岡野安雅

名古屋場所外は猛暑のアナウンス

炎天の明石漁港や船の錆び

風鈴や診療終へてくつろげり

五輪への応援の声蝉時雨

大空に白い糸ひく夏つばめ

山本達人

炎天に決意の固き散歩かな

深緑田んぼに入りて枝蛙

短夜に読書すすめる波の音

雨上り心ときめく蛍川

梅雨寒や眠れるままに逝きにけり

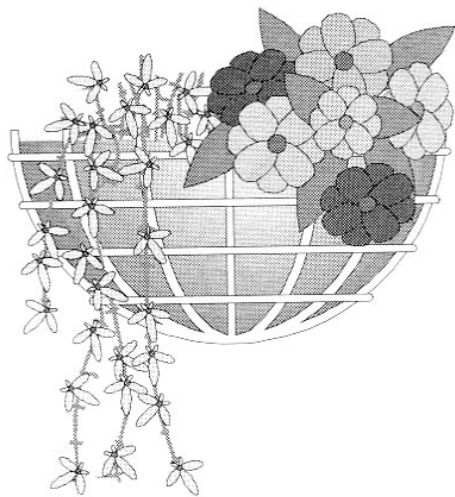
田島昭久

墓参り周囲色どる百日紅

穴探し蟬の脱皮を見きわめし

立秋や風はやさしく吹きにけり

屈まれば大きな花あり草芙蓉



那須野集

主宰選



万緑の屋久島の香を吸ひ込み

橋本修平

新涼や静かに閉づるにじり口

吉田啓悟

海亀の産卵待てり星流る

夕やみや板戸にうかぶ白牡丹

海亀の足跡残る砂熱し

堂守の欠伸をひとつ霧の朝

悠久の滝のしぶきや屋久の杉

つくばひの水に寄りくる秋あかね

いつの間に脇道に消ゆ道をしへ

行合の暮れ残る空法師蟬

朝顔の垣根涼しき散歩道

青木英林

サイレン鳴り三尺玉が天を衝く

丸山酔宵子

月照らす水面の銀波義姉の逝く

坂道をペダル踏み込む油照り

夏空を真二つに割る飛行機雲

メール開け友の訃報や秋の声

空蟬を残して七日の命かな

雨上がりひぐらしの声さえわたる

夕餉終へかすかに聞ゆ遠花火

赤みそを付けてがぶりと新生姜

さくらんぼ物言ひの似る姉妹

長久保郁子

夕日さし花閉じ初むる芙蓉かな

松本信子

下帯のひとりめがけて小滝落つ

風あれば風に従がふ青田かな

訪ふ家のチャイムのそばの夏椿

深山の神社に詣ず晩夏光

見上げたるビルのガラスに雲の峰

灯籠の火影に映ゆる参詣人

氷菓子両足ゆらし子は待てる

新涼や丘に畑ある北の大地

じじと鳴く落蟬はなほ羽撃きて

池内とほる

深山の水で醸さる冷し酒

坂上じゅん

落ち蟬の屍の側に抜け殻も

一山が霊園となり女郎花

蟬死して猶残りをる蟬の殻

片蔭の長くなり道に人戻る

蟬死して空蟬もまた風に飛ぶ

白南風や水の逆立ちて泡流る

魂迎へ風のそよぎを声と聞く

万緑や流水岩に飛沫高し

一番のティーグランに赤とんぼ

柳田皓一

七月の柳は水に影つくる

郡山真帆

恋の火を燃やせとばかりさるすべり

アガパンサス見上ぐるごとく日照草

冷酒の苦さ含みて日暮れるや

起き伏しの一間に咲ける月下美人

蟬時雨遠く聞こえて近くなり

蟬時雨黒雲厚くなりにけり

空蟬は命あるごと爪たてをり

青芝にでんぐり返りの子供達

瀬の滾り秋日は四圍にはねてをり

松田利秋

草いきれ巨木をあふぐ園の中

菊地崇之

爽やかや大河にはねる魚の音

溪流の瀬音に白き半夏生

色褪する作務衣の僧の箒跡

踊りの輪幼き手足動かして

身に入むや閉山近き尾根の道

朝顔の見送り受けて足軽し

電車待つホームの向ひ濃紫陽花

ひぐらしや参道長き社かな

朝顔の垣根を越えて蔓延ばす

後藤克彦

雲海を眼下に眺め富士山頂

吉田博行

空蟬を一行にして遊ぶ孫

富士登山湧き立つ雲の下にみゆ

蚊の群と闘ひながら草掻り

仰ぎ見て続く急峻富士登山

草刈の鎌の先には赤棟蛇

朝顔や枯れて忘るる鉢一つ

夏の伊勢海老料理で味競ふ

水撒きのホースの先に虹の色

朝顔を室内に蔓天井へ

長島清山

向日葵やわはわははと笑ひをり

夏が来て捨てるに惜しき造花かな

仏壇に涼風通し供へけり

海の日の潮の香燈台朝景色

撫子集・那須野集鑑賞 八月号より

客員 村上克哉

撫子集

藁積り錆色の道若葉雨

本郷宗祥

大川沿いの堤や、公園、城等に咲満ちた花びらが散ったあと、蕊が地面を赤く染め降り積もる。踏むのを躊躇うほど趣がある。やがて錆色になり初夏を迎え、木々はみずみずしい若葉をつけ、蕊の降り積もった道が若葉雨に濡れている。多くを言わず下五の季語でまとめ風情がある。

土の香の深まる小径走り梅雨

米田文彦

五月下旬から末頃にかけて梅雨めいた天候になる「走り梅雨」で、晴天に戻ってくる場合が多い。春の日差しに匂う土は柔らかく「土匂ふ」季語もある。六月十日前後からは梅雨入りとなるが、やがて来る頃を土の香深まると捉えた感覚は情緒豊か。

春潮の磯に残さる潮だまり

小林美登里

春になると海面が豊かにふくれてくるように感じる。干満の差が人目につくほど大きく、大潮のときなど町の中の溝まで潮が差してくる、引き潮は遠くまで広々と干潟になり、潮の速さについてゆけない水母が残っていたりする。磯のくぼみに海水が残り潮だまりが、あちこちに出来ている如何にも春の磯らしい景。

嵐山の流れゆったり船遊び

岡野安雅

夏の暑さを避け河川や湖、海に船から景色を楽しむ。松島、琵琶湖、隅田川、東京湾はそれぞれ趣があるが嵐山は格別。四季を通じて楽しめる、特に桂川上流の保津川の川下りは有名。ゆったりと船遊びとは羨ましい。

(以下略)

伝言板

1 第十回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2012年10月12日(金)

14:00～17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室〔別添地図参照〕

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第十一回本部句会

①日時 2012年11月9日(金)

14:00～17:00

その他事項は第十回に同じ

3 吟行(2012年度吟行方針)

毎月同じ場所を吟行し、日本の四季の微妙な変化を認識する。なお今年度は吟行後の句会は行わない。

①第十回吟行(原則第四火曜日)

日時 2012年10月23日(火)

13:30～15:30位

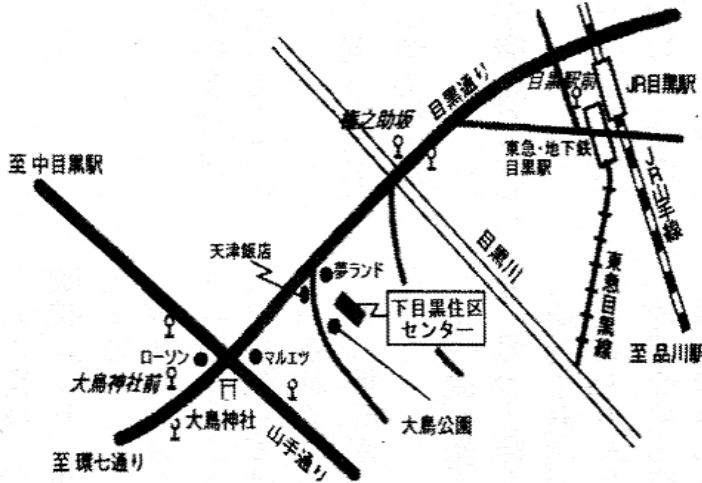
場所 新宿御苑
集合 新宿御苑正門前
入場料 各自負担 200円

②第十一回吟行

日時 2012年11月27日(火)

13:30～15:30位

その他事項は第十回に同じ



4 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてははその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜

芭蕉

三段切でも可

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。

ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。